

明解日本語
アクセント辞典
第二版

金田一春彦 監修
秋永一敏 編



明解日本語 アクセント辞典



監修 金田一春彦
編 秋永一穂

ほかの... 東京... それよ... 言葉ど... ラジ... 行って... 外国... 発音が... 関東の人... アクセン... 高まりつつある。

現代の日本人は、この要望にこたえる日本語を作り上げる義務をもつ。理想的な標準日本語は必ず生れなければならない。それは恐らく全国各地の方言から採を集めた。豊かな。しかも洗練された言語体系である。そのような言語の基盤になるものは、やはり現実に日本全国に流通語として通用している、現在の東京語をおいてほかにはない。この際、すべての日本人が、日常の生活言語の柱かに東京語をも一柱自分のものにするのが望まれる。

東京語のアクセントを記載した辞典はすでに世上に何冊か出ている。特にNHKの『日本語アクセント辞典』は、自心的な編修態度を反映して、標準的なものとして名を得ている。しかし、この種の辞典にあげられた語彙の数は残念ながら少なく、たとえば固有名詞の条を欠き、また動詞・助動詞の変化の項にはほとんど触れていない。これらは異なるに、東京アクセントに相当通じた人にしては

三省堂

1958年6月25日 初版発行
1981年4月20日 第2版発行



明解日本語アクセント辞典
第2版

定価 2,500 円

1981年4月20日 第1刷発行

監修者 金田一春彦 (きんだいち・はるひこ)

編者 秋永一枝 (あきなが・かずえ)

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 株式会社 三省堂 八王子工場

発行所 株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目22番14号

電話 編集 (03) 230-9411

販売 (03) 230-9412

総務 (03) 230-9511

振替口座 東京 6-54300

<2版アクセント・924 pp.>

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

© 1981 Sanseido Co., Ltd.

First Edition 1958

Second Edition 1981

Made and printed in Japan at the Sanseido Press, Tokyo

即興日本語
心得小辞典

第二卷

金田一春彦監修

林房雄編

夫成上川 丁装

序

全国の日本語の中で、特に東京の言葉だけが正しい言葉で、ほかの地方の言葉はまちがった言葉だという行き方に私は反対である。東京語は決してそのような意図をもって作られた言葉でもないし、それよりも東京生れの人だけが得意げにふるまい、ほかの地方の人の言葉を見くだす態度はおよそ不愉快である。

しかし一方、日本語の乱れが人人の口にのぼって以来久しい。ラジオやテレビから流れる日本語は、ヨーロッパあたりへ持って行ったら、数か国語が代る代る聞えるようなものである。日本語を学ぶ外国人は、日本語を教えてくれる日本人ごとに、語彙表現が異なり発音が異なることをしきりに訴える。特にアクセントに至っては、関東の人と関西の人では高低を全く逆に発音し、また地方によってはアクセントが全然ないところさえある。代表的な日本語、規格にあった日本語を望む声は内外を通じて高まりつつある。

現代の日本人は、この要望にこたえる日本語を作り上げる責務をもつ。理想的な標準日本語は必ず生れなければならぬ。それは恐らく全国各地の方言から粹を集めた、豊かな、しかも洗練された言語体系であろう。そのような言語の基盤になるものは、やはり現実に日本全国に共通語として通用している、現在の東京語をおいてほかにない。この際、すべての日本人が、日常の生活言語のほかに東京語をも一往自分のものにしていくことが望まれる。

東京語のアクセントを記載した辞典はすでに世上に何冊か出ている。特にNHK編の“日本語アクセント辞典”は、良心的な編修態度を反映して、標準的なものとして名を得ている。しかし、この種の辞典にあげられた語彙の数は残念ながら少なく、たとえば固有名詞の条を欠き、また助詞・助動詞の類や動詞の変化の類にはほとんど触れていない。これらは要するに、東京アクセントに相当通じた人にしては

じめて使いこなせる辞典だった。

本書編纂の意図は、これらの点を考慮し、どんな人でも使用できることをモットーとした。特に東京アクセントになじみの薄い人から一番要望されているのは、一体どういう言葉はどういうアクセントをもつかという、一般法則の呈示である。この辞典で一番力を注いだのはこの点だと言っている。

なお、個々の語については、アクセントのみならず、ガ行鼻音や、母音の無声化の有無など発音上注意すべき点を注記して、アクセント辞典であると同時に、日本語発音辞典としても役立つよう意を用いた。

ところで、この辞典は私が手をくだして作ったものではない。編修者は、現在早大国文学科の副手である秋永一枝君である。

四・五年前のこと、三省堂編修所では、同社から発行する一般諸辞典のための資料として、東京アクセントを記載した歴大なカードを作っていた。この仕事に直接あたったのは、当時同編修所員であった秋永君であり、この辞典の編修は、そのカードを基礎にしてはじめられたものである。同君はその後世に出ているすべての東京アクセントの文献を渉獵する一方、個々の専門語については、一一その道の専門家で、しかも東京生れ、東京育ちという条件を具えた人の門をたたい、そのアクセントを確かめるといふ慎重ぶりだった。

なおそのほかに、寸暇をさいては東京各地および近郊を駆け回ってアクセントを調査して歩き万全を期したといふのだから、その骨折りは驚嘆にあたいする。私はただ全体のでき上りを通覧し、巻末の法則のまとめ方について多少の知恵を貸したにすぎない。これは、私の責任のがれを意味するのではない。ほとんど口出しをする余地がなかったのである。

この辞典が成るに至るまでには多くの方々の御好意と御協力をいただいたが、中でも有益な教示と便宜を与えられたNHK放送文化研究所・国立国語研究所の方方、土岐善麿博士、榎垣実氏、鈴木幸夫氏、貴重な時間を割いて一一の語を発音して下さった次の諸氏に厚くお礼申し上げる。

芥川也寸志、安倍季巖、安藤更生、飯島小平、飯島正、池田理英、石川光春、伊藤康安、岩本堅一、緒方規雄、小沼丹、加藤光次郎、加藤誠平、神尾明正、川合幸晴、岸野知雄、倉橋健、後藤真、斎藤直芳、佐口卓、鈴木孝夫、関根吉郎、高木純一、高島春雄、高山英華、滝口宏、辻光之助、坪井誠太郎、戸塚文字、中能島欣一、中村芝鶴、中村吉三郎、中村守純、仁戸田六三郎、野口弥吉、野村保、野村万蔵、林健太郎、檜山義夫、古川晴男、古川晴風、宝生弥一、宮川曼魚、武者金吉、山辺知行、山村宗謙、亙理俊次、渡辺辰之助（敬称略）

今この辞典を世に送り出すに際し、読者各位が当事者の意のあるところを汲んで、この辞典を活用してくださることを望んでやまない。そして、さらにこの辞典の不備の点についても卒直な御意見をお寄せ下さり、将来の改訂のために資することができるならば、これに越した喜びはない。

昭和三十三年五月五日

金田一春彦

第二版の序

この辞典も、初版を世に送ってから二十二年余りになる。暖かく迎えて下さった御愛用の各位には慎んで御礼申し上げる。二十二年も経るうちには、日常使っている日本語の語彙も出入りし、中にはアクセントそのものが変化したものもある。ここに採録語彙をふやし、第二版をお届けする次第である。

日本語のアクセント辞典としては、これとは別にNHKの『日本語発音アクセント辞典』というものがある。一つあればいいではないか、それに辞典によって単語のアクセントがちがうものがある、それはどうしたのだ、という声が聞える。が、そういうものではない。アクセ

ント採録の目的にちょっとしたちがいがあるのだ。

NHKの辞典は、一口に言うと全国共通語の発音とアクセントの辞典だ。ということは、必ずしも東京という土地の発音とアクセントを収めたということではない。語形や発音の方で、オッコチルとかシャジ(匙)というのは、東京人の使う言葉であり、東京なまりであるが、そのようなものはNHKのアクセント辞典には採用していない。それに応じて、アクセントの面で東京なまりと判断されるようなものは、省いてある。

一方、この私どもの『明解日本語アクセント辞典』は、純粹の東京の発音、東京のアクセントと見られるものに焦点をあて、俗語や東京なまりの類までとりあげた。そのために資料としたのは、すべて純東京人と見られる人であり、中には、現在では老人層でないとはほとんど使われていない形もあげてある。これも特別の用途があるだろうとの考えによるもので、意図するところを諒承されたい。

なお、この辞典の初版は、秋永一枝君が原稿を書き、私が通覧し意見を述べたものだった。が、今回は秋永君の書いたものをほとんどそのまま活字にした。秋永個人の著書と考えて頂いてよい。一言お断りしておく。

終りに際し、この本の成るについて、協力を惜しまれなかった各位に感謝の意を表する。

昭和五十六年四月三日

金田一春彦

この辞典を使う人のために

1. 総記

この辞典は、日常多く用いられる語を中心として、固有名詞を含めた約六万四千語を選び、その“標準的なアクセント”と合わせて“発音”を示したものである。

アクセントは単語ばかりでなく、助詞・助動詞・接辞・造語成分など、複合する語によってアクセントの定まるものにも記載して、実際の会話の便を計った。

なお、巻末に“アクセント習得に必要な法則”をあげて、標準アクセントをマスターする一助とした。

2. 見出し語について

a. 表記法

(1) 発音の表記法

① 見出しの部分に、**カタカナアンチック**体を用い、発音及びアクセントを表わした。

② 表音式をとった。現代かなづかいとは必ずしも一致しない。

(イ) 引き音は **ー** で示した。**イ、ウ** のうち引き音にも発音するものは小さい★の印をつけて **イ、ウ** のように表わした。 —解説 19 ページ参照—

(ロ) 促音は、小文字の **ッ** で示した。

(ハ) **ジ・ヂ、ズ・ヅ** はすべて **ジ、ズ** で表わした。

③ **ガ行鼻音**は、**ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ** のように半濁音符をつけて示した。

—解説 17 ページ参照—

④ 母音の無声化は、細字によって示した。

—解説 19 ページ参照—

⑤ **ウマ** (馬)、**ウマレル** (生れる)、**シラウメ** (白梅)、**ウモレギ** (埋れ木) のような、自然の発音で [m] の音になるものは、**ウマ、ンマ、ウマレル、ンマレル、シラウメ、シランメ、ウモレギ、ンモレギ** のように併記した。但し **ウモー** (羽毛) のように、**ウ** の次に意義の切れめがあって [m] の音にならないものは **ウ** のまま記した。

⑥ 外来語の発音は原則として一般の慣用に従って表記した。例えば外来語にみられる [kwa] は **クワ**、[di] は **ディ** などのように、**クワ、シエ、ジェ、チエ、ツエ、ツォ、テイ、デイ、デュ、ファ、フィ、フェ、フォ** の表記も用いた。

—解説 21 ページ参照—

⑦ 助詞・助動詞・接辞・造語成分などは、複合する単語の部分を……で代表させ、……ラレル、……ケン(～県)、ゴ……(御～)のように表わした。但し、見出し語にアクセントを示しにくいものは、ひらがな見出しとし、各習得番号のアクセント法則を参照させた。

(2) アクセントの表記法

—解説 11 ページ参照—

① 高く発音する部分は^ˊで示した。但し、次が低く発音される場合には^ˋを付した。

キ^ˊジ (雉) イヌ^ˋ (犬) サル (猿) モモタロー (桃太郎)

② 連語など、アクセントに切れめがある場合には、そこに・を置き、区切りを示した。

アキノ・ナナクサ (秋の七草)

③ アクセントの切れめの有無によって、複合語の後部のアクセントが変化する場面があるが、スペースの節約上次のように表わした。

(イ) 次のような場合、複合して切れめがなくなると、間の低い拍が高く平らに変化する。即ち^ˋの部分は切れめがある時は低く、切れめがなくなると高く発音される。

センザイ・イチグー, センザイイチグー →

センザイ(・)イチグー (千載一遇)

ミナモトノ・ヨシツネ, ミナモトノヨシツネ →

ミナモトノ(・)ヨシツネ (源義経)

(ロ) 次のような場合、複合して切れめがなくなると、後部の高い拍が、低く平らに変化する。即ち^ˊの部分は切れめがある時は高く、切れめがなくなると低く発音される。

ジガ・ジサン, ジガジサン → ジガ(・)ジサン (自画自賛)

ニジュー・イチ, ニジューイチ → ニジュー(・)イチ (二十一)

(ハ) 次のような場合は、常にアクセントが変化しない。

ヤマダ・バナコ, ヤマダバナコ → ヤマダ(・)バナコ (山田花子)

b. 配 列

(1) 見出しがなの配列

発音式五十音順によるが、同じカナのことばがつづく時は、次の方針によった。

① 拍数の少ないもの(ヤ, ユ, ヨなどの拗音及び外来語におけるア, イ, エなどの小文字を含むもの)や、引き音(一)及び促音(っ)を含むものは、直音の前に置いた。

イシヤ (医者) イシヤ (石屋) の順

② いわゆる清濁は、清音, 濁音, 半濁音の順に配列した。

③ 助詞・助動詞・接辞・造語成分など、……のつくものは、……のつかないものの後に置いた。

- ④ 人名及び活用形に限り、姓及び終止形の見出し内に収めた。

アシカガ 足利〔姓〕

～・タカウジ, アシカガタカウジ ～尊氏

サク 咲く サカナイ, サゴ, サキマス, サイテ, サケバ, サケ

- ⑤ 現実に行われていても標準アクセントとしては望ましくないものや、現実に行われていないが標準アクセントとしては望ましいものに限り、()内にそれぞれ次のような注を付した。

アネ, (アネ は避けたい) 姉

クワ, (クワ は避けたい) 鋏

クモ, (クモ も許容) 雲 オル, (オル も許容) 織る

(2) 発音及びアクセントの配列

- ① 発音及びアクセントの同じ語は、原則として同じ見出しのもとに入れた。

但し、……を伴う助詞・助動詞・接辞・造語成分の類は別項をたてた。

- ② 発音が同じで、アクセントの異なるものは、語源的順序を重視し、次いで、その語のアクセントを考慮に入れて配列した。

- ③ 同じ語彙で類似の発音をもつものは、慣用及び標準音として望ましいものに重点を置いて配列した。

(イ) それぞれの項をたてて、併記した。

ハイ, ハエ 蠅

ハエ, ハイ 蠅

(ロ) それぞれの項をたて、望ましくない方を見出しにのみ望ましい形を併記した。

アタ, アチタ 貴方

アチタ 貴方

(イ) 慣用または、望ましい方を見出しに併記した。

ジッポン, ジュッポン 十本

(ロ) 誤用または望ましくない発音の場合は、⇒ で正しい発音を参照させた。

シャジ, (新は シャジ) 匙 ⇒ さじ

(イ) 清濁のみ異なるような語の類は、慣用または望ましい方を先にして同一項目に収めた。

- ④ 二通り以上のアクセントがあるものは、標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記した。また年代的に新しいアクセントや、伝統的で古めかしいアクセントの層が目立つものに限り、(新は……), (古は……)のように示した。但し、これはあくまでも相対的な異なりで、一定の年代を示すものではない。

オトメ, (古は オトメ) 乙女

アカトンボ, (古は アカトンボ) 赤蜻蛉

ス, (新は ス) 巢

スシ, (新は スシ) 鮓

ノゾム, (新は ノゾム) 望む, 臨む

カキナオス、(新は カキナオス) 書き直す
 タカイ 高い …… , タカクテ、(新は タカクテ)、……

3. 解説の部分について

a. 表記法

原則として、漢字・ひらがなまじりとし、() 内に用例・補助解説を、[]、() 内に略語・補注などを示した。

(1) 漢字

- ① 当用漢字を重視したが、必要により当用漢字以外の漢字も用いた。
- ② 当用漢字による書き換えのうち、意味のとりにくいものなどは、もとの字を()に入れて示した。但し、複合語以外は併記した。

日食(蝕) 包(庖)丁 炎, 焰 切る, 斬る

- ③ あて字は慣用のものに限り使用した。

ステキ 素敵 タバコ 煙草

- (2) 現代かなづかいを用いた。送り仮名は、誤読の恐れのない範囲にとどめた。

(3) 外来語

- ① 原語のスペルを入れ、[] 内に国籍を表示するのを原則とした。但し、英語は原則として表示しない。

パン pāo [葡]

ガラス glas [蘭]

ジャム jam

クリーム cream

- ② 日本語と外来語との複合語は、原則として日本語と原語のスペルをつづけて記し、英語以外は最後に国籍を示した。

マダガラス 窓 glas [蘭]

ナマクリーム 生 cream

クリームイロ cream 色

パンヤ pāo 屋 [葡]

- ③ 外来語と外来語との複合した和製語はプラスの印で結び、各のスペルのあとに国籍を示した。

ジャムパン jam [英] + pāo [葡]

コーヒーポット koffie [蘭] + pot [英]

b. 配列

同じ見出しが二語以上の語を示す場合は、コンマ、或はピリオド・を用いて次の順序により、併記した。

- (1) 和語、漢語、外来語の順
- (2) 語源に近いものから遠いものへの順
- (3) 感動詞・副詞の類、動詞、形容詞、一般名詞、数詞、固有名詞、省略語の順
- (4) 複合度の強いものから、弱いものへの順

4. 記号一覽

- 見出し語では、二通り以上のアクセント及び発音がある場合に用いた。
カミナリ, **カミナリ** 雷
 解説にあたる部分では、二つ以上の同音語がある場合に用いた。
ジシン 自信, 地震, 磁針
- 見出し語ではアクセントの切れめを示した。
サンジュー・サンガシヨ 三十三箇所
 解説にあたる部分では「及び」、「や」、「と」の意味を表わすのに用いた。
アオキ 青木【植・姓】
ジョーシンエツ 上信越く上野(信)・信濃(信)・越後(信)
- 助詞・助動詞・接辞・造語成分など、……を伴って表わされる見出し語のうち、前部の語のアクセントや音韻の性格により、複合語のアクセントが変化する場合に用いた。
 ……**ガ**; ……**ガ**; ……**ガ** ……が【助】(ト**リガ** 鳥~,
 ハ**チガ** 花~, ア**メガ** 雨~)
- 助詞・助動詞・接辞・造語成分など、……を伴って表わされる見出し語のうち、前部の語の拍数により、複合語のアクセントが変化する場合に用いた。
 ……**マル**: ……**マル** ……丸(キ**クマル** 菊~, ラ**ンマル** 蘭丸,
 ヒ**ヨシマル** 日吉~, ヒ**カワマル** 氷川~)
- 用例中、連続する語が同格でなく、後の語が前の語を説明するような場合に用いた。
- ★ **イ**, **ウ** のうち引き音にも発音するものは、**イ**, **ウ** のように示した。
テイネイ 丁寧 **クウ** 食う
- = 説明及び言い換えを示す。
オカガミ 御鏡(=鏡餅) **オッパイ** (=乳)
- ~ アクセントの区切りのある語で、二通り以上のアクセントがある場合、アクセントの変わらない部分の省略に用いた。
アトノ(・)マツリ, ~**(・)マツリ** 後の祭
 人名が姓の見出しに追こまれていて、姓にあたる部分のアクセントが変らない場合、見出し語の部分の省略に用いた。
ダテ 伊達【姓】
 ~**(・)マサムネ** ~政宗
- ~ 用例中で、見出し語及び見出し語にあてた漢字かなまじりの部分の省略に用いた。なお、省略した部分のアクセントが、見出し語のアクセントと異なるような場合は、アクセントを注記した。
バシ 箸(お~) **ハチ** 花(オ**ハチ** 御~)

< 省略される以前の形や、外来語で著しく発音の変化した場合などに用いた。

ユーコー 高校<高等学校 デパート <department store

+ 外来語が複合した和製語であることを示す。

ジャムパン jam [英] + pāo [葡]

クレパス, クレパス <crayon + pastel

⇔ 反対語・対照的な語を示す。

オーテ 大手(⇔からめて) オツ 乙(⇔甲)

⇒ 他項を参照させる意を示す。

ウタマロ 歌麿[人] ⇨きたがわ〜 (姓名全形を参照させたい)

ウデル 茹でる ⇨ゆでる (望ましい発音を参照させたい)

→ 巻末のアクセント法則番号の参照に用いた。

() アクセントに関する注を示す。

カミ, (古はカミ) 神 モミ, (カミは避けたい) 榎

アシタ, (副詞的にはアシタ) 明日 ヤマダ 山田(姓も)

() 見出し語では、発音上の言い換えに用いた。

(グはグとも) (アはヤとも)

特に外来語では、望ましくはないが慣用となっている形に用いた。

ベッド, (ベット) bed ファン, (ファン) fan

解説にあたる部分では、用例及び補助解説などに用いた。

[] 固有名詞、百科項目などの指示及び補注に用いた。

[] 外来語の国籍を示した。

〔略 語 表〕

品 詞	位 相 語	外 来 語
〔名〕 名 詞	〔医〕 医学・医薬	〔伊〕 イタリア語
〔数〕 数 詞	〔衣〕 衣服	〔蘭〕 オランダ語
〔副〕 副 詞	〔映〕 映画	〔希〕 ギリシャ語
〔連体〕 連 体 詞	〔演〕 演 劇	〔西〕 スペイン語
〔代〕 代 名 詞	〔化〕 化 学	〔華〕 中 国 語
〔接〕 接 統 詞	〔雅〕 雅 楽	〔朝〕 朝 鮮 語
〔感〕 感 動 詞	〔軍〕 軍 事	〔独〕 ド イ ツ 語
〔助〕 助 動 詞	〔建〕 建 築	〔仏〕 フ ラ ン ス 語
〔助動〕 助 動 詞	〔児〕 児 童	〔葡〕 ポ ル ト ガ ル 語
〔接頭〕 接 頭 辞	〔宗〕 宗 教	〔梵〕 サ ン ス ク リ ッ ト
〔接尾〕 接 尾 辞	〔書〕 書 物	
	〔植〕 植 物	〔拉〕 ラ テ ン 語
活 用	〔人〕 人 名	〔露〕 ロ シ ア 語
〔四活〕 四 段 活 用	〔生〕 生 物	〔和〕 和 製 語
〔上一活〕 上 一 段 活 用	〔俗〕 俗 語	
〔下一活〕 下 一 段 活 用	〔動〕 動 物	(英語は特記しない)

解 説

1. アクセントについて

現在“アクセント”ということばは、さまざまに使われているが、“日本語のアクセント”という時の標準的な使い方としては、“個々の語について定まっている高低の配置”という意味である。

“語”というのは、ほとんど文法でいう単語と同じとみていただいてよい。例えば、「橋」の時はシを高くいう、「箸」の時はシを低くいう、というようなのが日本語のアクセントである。これは既に御承知のことと思う。但しここでちょっと注意してほしいことは、ある語を発音した時の声の上がり下がり、それがそのままアクセントだとはいえないことである。

例えば、同じ「箸」という単語でも、「箸？」というように相手に問いかけの気持でいう時は、 $\bar{\text{シ}}$ とといったあとで、また語尾を上げて発音する。この場合の語尾の高まりは、アクセントではない。なぜならば、これは特定の語について決まっているのではなく、“問いかけ”つまり返事がほしいという、一般的な心理によって決まるからである。こういう声の上げ下げは、大体、日本語を通じて全国共通の現象であるから、特に骨を折って覚える必要はない。ところがアクセントは、その“語”について決まっているもので、それも地方によって異なるから、特に標準語を使おうとする場合には、“学習”が必要である。




人によると、アクセントは単語によって決まっているというが、「箸」と「箸箱」では、「箸」のアクセントが違って変だと思われるかもしれない。しかし、これはそれでよい。なぜなら、「箸箱」は一つの“複合語”であって、「箸」とは別の単語だからである。複合語は、アクセントの法則に従って変化をする。つまり、基本的な語と複合の型とを覚えれば、どうにか使いこなせるものである。そこで、この辞典では、巻末にアクセント習得法則をもうけ、本文の単語から参照できるようにした。

助詞や接尾辞などはやはり単語だが、それだけを切り離して発音することがない。そこで、この辞典では、名詞や動詞などについた時のアクセントの型を示した。





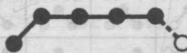








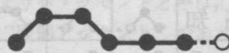


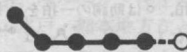

もう一度くり返せば、日本語のアクセントは、“語による高低の配置のきまり”である。ここで高低の配置といっても、その高い部分と低い部分との開きが、音楽で4度だとか5度だとかいうような、そんなやかましいものではない。ただ上がっているか、下がっているか程度のごく大まかなものである。つまり、すべての語は、低い部分と高い部分に分けられる。従って、“アクセントの型”というのもごく少数しかなく、東京アクセントでは一拍語ないし六拍語は、次のページの第1表の型

名 詞 の 型

第1表

拍数 型の種類		一拍の語	二拍の語	三拍の語
平板式	平板型	 ヒ(ガ) 日(が)	 トリ(ガ) 鳥(が)	 サクラ(ガ) 桜(が)
	尾高型		 ハナ(ガ) 花(が)	 オトコ(ガ) 男(が)
起中	起			 ココロ(ガ) 心(が)
	中			
伏高型	伏			
	高			
式	式			
	頭高型	 ヒ(ガ) 火(が)	 アメ(ガ) 雨(が)	 イノチ(ガ) 命(が)

一 覧 表

四 拍 の 語	五 拍 の 語	六 拍 の 語
 トモダチ(ガ) 友 達 (が)	 ニホンガミ(ガ) 日 本 髪 (が)	 ムラサキイロ(ガ) 紫 色 (が)
 イモート(ガ) 妹 (が)	 オショーガツ(ガ) お 正 月 (が)	 ジューイチガツ(ガ) 十 一 月 (が)
 ミズウミ(ガ) 湖 (が)	 ニワカアメ(ガ) 俄 雨 (が)	 アイアイガサ(ガ) 相 合 傘 (が)
 ウダイス(ガ) 鶯 (が)	 ハルガスミ(ガ) 春 霞 (が)	 タタミオモテ(ガ) 畳 表 (が)
	 オナイドシ(ガ) 同 一 年 (が)	 コナオシロイ(ガ) 粉 白 粉 (が)
		 オマワリサン(ガ) お 巡 り さ ん (が)
 コーモリ(ガ) 蝙 蝠 (が)	 オツキサマ(ガ) お 月 様 (が)	 下ーカイドー(ガ) 東 海 道 (が)

注. ●は名詞の一拍を、○は助詞の一拍を示す。